

[illegible]

に之れが完成を期せんと言明す

用ひきまざる木はつれ
 柳の枯葉はろほろと散る
 上りたる我門に
 寂れ忘れて予等が上思ふ
 等をいたはる更けし夜に
 雨戸をゆるする風の音さく
 落ちる木の葉のさそはれて
 ひびり文よむ恋を打つなり
 願はごさする二人づれかな
 朝霜で

利年和歌募集
 題 松上鶴

折折ろ、殿の方から三人の侍がやつて
 来た、何れも十二分の酔町の容子で、
 先へ立て来たのが北浦新吾、後へ續て
 齊藤左司馬山田源左衛門、若里見
 の家次でございます、此北浦新吾と
 のは納戸役を勤めて三百石を取っていて、
 豫て上總屋の娘なるに懸戀をしていて、
 度々草を貰い行く、先方で、誠中の口

梁川庄八
 小 金井 蘆洲 演
 第四十七回

等の評論を加へず唯英國が獨に對して
 ▲敵意 なきを保證し、香相亦右の演説
 に同情を寄せ英の外安上に程意無と

が愛嬌を振商く者だから、北浦は

住所氏名御明記の事
 紙上に以てす
 初期限来る十二月二十日
 發表は四十五年一月元旦の本
 年の通り勅題和歌集致候に
 好の御方は煮つて御投詠あらん



目録んで、あの娘は乃公に心ある
 し、自分には事と乃公の妻に申受けよ
 といふれは事と乃公に定めて、或時
 應上河島山田浦大朝所兩人を兼人
 頼み、妻に致したいからと話を待込
 と、上總屋與兵衛は、折角御城中の
 身分のある旦那様から御座り差上た
 は存じますが、彼れは、彌娘で聲を取
 ます身で、他家へは嫁づけましては
 手前共の家が立ちませんので、何う
 思ふからず許さしまして、何分御本
 へ定歌御取組を願ふと、体よく斷
 した、夫でも強つてといふはませ
 から二人は立歸つて、北浦當吾に諸
 するで、まさか三百石の祿を拾つ煙

たゞ諸きらめやうと云ふので斷

將校三名、國軍の爲武官に
ての說北獨逸に於て諸國各認
議台愈六日を以て獨逸通商條
約に關して討論を開始すべしと
危機に瀕したる英獨關係は稍
至りたるも其の政變は定も不
變、渡世元花居兵衛の卒吉之
爲兩國の利益に中絶無効也
の英士附國の利益に關して
の御名代官殿下に對しハハ
萬勅章を御進進に相成り隨員
あり皇太后百官と共に宮殿
一行を離宮に迎ひ款待不遺
に接つて、他家へ移けるも
は何事であらう




1

寒冷之候各位益々御隆昌奉大賀候陳は今回販路擴張且
位の御便利を謀り左記の通り直接販賣店を設置し御小
開張目下酒價暴騰の折柄に拘らず御披露さして特別廉
價發賣仕候間何卒御試用の上多少に限らず御用命の
懇願候 敬具

發賣元 百合正 宗京城支店
主任 石生重治
電話一五一五番

保商権
名譽
赤田酒
チムサマリ
の佳味は本酒唯一の特徵なり



ツケウ
 品管消厚無難の送
 品風味言外にあり
 用少量陶然

權商標
 名所
 布田海
 子ムサマザ
 色を發揮す
 香取紅豆の名醸し
 して大に灘酒の特

標商權
 雲
 イダレマ
 品質材料
 質高尚實用と經濟
 に最も適す

瓶詰酒 割引特價 壹樽金拾八圓以上種々有之候
防入割 不屬
品 割引特價 壹升瓶金七拾錢外二四合二合一合瓶外
景 開店披露の印として當分

最上 衛門 釀
醬油 印
特約 一手販賣
右荷物延着に付着荷の上は景品付廉價發賣可仕



●御用記者の末路

小坂日報社山支局員松波龍門は十二月
 日限り京城日報社に關係なき旨發表
 られたるが今其原因に就き聞く所に
 れば同人は從來群山日報記者たりし
 同社の一時休刊と同時に退却せし者
 が他に職を求め得ずして糊口にも

し居る最中其妻は出立するを要なく
出立し入る處なければ出すに由なく
夫を悲嘆の源に事れ居たるを見るに
兼ねたる坂上長良夫妻其他有力者の
讒を受けて漸く離縁を脱れ得居たる
のなるが京城日報社にて群山支局設
く同時に同支局員に採用され一定の
入を得る如くなるや遂かに僱傭大
なれたるのみが群山附縁を利用して
に群山の平和を破るの記事を掲載しつ
てありき近頃は遊藝問題に關して無算

●再觀總督府醫院

織きに物品販賣所がある馬頭山(ウマコウサン)上高(カミタカ)の地商(チカウ)に遠ざかつてゐるから患者(ヤクモノ)が看婦(カンブ)の便宜(エイケン)を圖つてゐるのだ。エハ一枚、一錢二厘(ニリン)市(チ)中のツレに比し八乃至一錢三厘(サンリン)庶(シヤ)底(テイ)の東京製(トウキョウセイ)のコタ(コタ)イである。正宗(マサムネ)の一升瓶(シヨウビン)がある看婦(カンブ)が

ぬ遠逝の不愿病人があると見ゆる、
痼病室は七機ある有難いことだ、本
の背後右手に隔離室が建てられた近
移轉して從來の隔離室を消毒して普
病室に充てるか説明される。

機関「レントゲン」装置と稱して最新
 のもので自分の見聞によれば日本で
 陸軍々學校、東都府府及び總督府
 内の三處にしか無い筈のものだ、現今
 透や露西亞等でも密にユツキス光
 を病者に應用して効果顯著なるもの

二十日、錦南浦區裁判所檢事藤川馬五
氏が御自分は御存じないが立派な要

女に聞山縣名新縣東山キナニナ
 郡地吉田郡太師（二）同所坂口小春（一）
 とて壽太郎は妻子のある身ながら
 家なる小春の容顏の美しさに懸想し
 義の關係を結び居たりしがト
 太郎は妻子を捨て金五十圓を懐中し
 春と手に手を取て朝鮮さして飄落と

●井門 本店 鶴吉の義侠心
行路者に縮服の袖
門本店の鶴吉と云へば美濃縣生れで
海りとした慈母なるは改めて披露し
とも幹士諸氏の幼くより御存じの
が此故は天性義侠心深く他人が
つて居るを見たら着衣を入置して
取り来る筈なりと

由なるが三日午後三時、町商
會所前御路に倭致文(二)なるもの
付倒れたるを南部署警官發見し取
の結果行路病者なるより京城府廳に
扱したるが之を見たる鶴吉不憚に思
ふ小綿の給持合せなきより縮緬の給一
枚衣一枚足袋一足以現金若干を寄贈

●呑むこと 一萬餘圓

▽不歸に極むた和買人
川米豆取引所不正仲買人に對する其
の取調べは續行中なるが茲兩三日の
に終了したる上は檢事の起訴する處
なるは一貼の疑を容れずと云ふ向き

等不正や買入中の重なる筈目、倉庫
期きは八九十月臘買入に於て既に各
萬餘圓の行方爲をなしたるの事實
所したりと云へば監督官廳にては彼
の營業認可を取消すならんと云ふ困
取所は尙買入の取調中なるを以

コ氏對 李太王 事件公判期
 四月十五年一月十五日
 第二回公判に於て被告代理人より管
 治外法權撤去に斷し防訴の抗
 爲したるも該抗辯は棄却せられし

四十圓に賣せぬ

とも決して断言したは提起致す氣遣
 屋なく候▲花月に於ける借金頭の
 たんは千八百圓の借金を背負つて重
 に罹り一時は危篤に漸したるより擡
 の頭痛熱暑もさること乍ら旅に病む
 たんは憐れに候中檢査役連は近々連
 者署が所と爲す由に突如等と

「な、熱病、病む窓の南や落葉」△同家の
「第二」をし下り曰く「妻、徳太夫の
さんは無根なのと取消して雨、露な探
のに邪魔だからよ」と巧い言を云ふ
と思ふと矢、庭に立上つて「サア一
つりませう」と大手を擡げる。「何を取
のか」と問うと滑したもので「角力
」と云ふ戯手にならずに肩を
大相撲を取り、幾たびも勢盡くなる
△同家の胸筋は義太夫清古中なるが
の差くない、いりほど物覺わく悪く、

から愛想を盡されて居るとは御馳傷
大敵でゐる哩、クワイフ、アハハ、
▲掏翠樓は彼の食道樂の閉店
同時に同家の仲屋を全部抱ひ込み仲
々位を猛烈に發揮致し居候▲同家
子は海風と新開記者は見た計りで腹
中居候▲井門の政子曰く

「から僕になるんだ」とて大方味々清
 今の犬黒柱丸子重病に罹り熱に浮か
 諸調子より中居候出なるが大方歎し
 客の生霊が取付いてるのだらうと
 特々同家の美形今奴は近々望氣に
 んだとして八八はやらすに活花と琴
 古々元陶者の伊達子は京阪券の

家席から名も其儘の伊達子で姉のいと共稼ぎ何分御鼻負にと提灯を點しからとて決して拙者と譯ある大策になし同席の三幸は義太夫が上達しで義太夫の巧い人が情人に欲しい成し回つて居る相に候(靜齋)

廣 告

電話增設
三井物産株式會社
仁川出張所
船船受渡掛用 長六三番
穀糧品食 鐵掛用 四三八番
走出納絨布用度掛

廣

旭町一丁目
朝日新聞
電告熱

● 諸公債諸株券

現物賣買

迅速確實に御取扱可申候

兼業

既製洋服御用達

京城本町三丁目

大坂野村七代理店

田中友吉商店

蛇印 蛇印 蛇印
呼吸器丸 呼吸器散
改訂 改良劑
藥つねせか
會商平丹 鋪本

腹痛 下痢
腸の患ひ一切に
能効
本舖 津村敬天堂

組櫻京東
定製表型
申越次第送
星仕候

命の母
東京販賣店
明治町三丁目
羽田常惠藥房

轉移
井出百貨デパート
今度豫て新築中の本町一丁目民團役所角へ移轉しました
つきましては移轉御披露の爲十二月一日より十日間記念
大賣出を致す總て最新流行の賣用品は悉皆取揃へてあります直段
は賣出中特に正札より一割引を以て御願致しますとぞ多少に不
拘御買上御來店の程偏に御願申上ます

最新形帽子類
膝掛毛布類
メリヤスシャツ類
毛袋 着下類
シヨル首巻類
洋服附屬品類
洋小間物類

化粧品類
葉巻金口貨類
洋酒食料品類
和洋菓子類
和洋菓子類
洋食器具類
其他各種類

たんせき散
複方吐酸散
能効
本舖 津村敬天堂

特約店
油醬
甘露油醬
大日本麥酒會社
諸漬物問屋
大上友太郎商店

比無界世
清酒
大販賣
佐藤牧商店

鐵冷温泉
旅館並に浴客席貸
廣安喜次郎
京城明治町一丁目 森村實店

齒術所
總督府各官衙御用達
官公私立各病院御用達
山岸天佑堂藥房

景品附京城聯大賣出
賣出期間 十二月一日ヨリ同月
抽籤場所 京城壽町 商
及同期日 明治四十五年
景品引換期間 自同年一月十日
及引換場所 每日自午前九時
京城日本人

景品總額七千

壹等 金千六百圓 四拾
貳等 金八百圓 貳拾圓
參等 金六百圓 拾五圓
四等 金貳百圓 五圓
五等 金貳千圓 五十錢
以下空籤ナシ
但シ買上金壹圓每

京城事務

加盟店ハ一定ノ地